

胡沅浦は黙然と致庸を見て落ち着いて言った。

「そなたの話は終わったか？」

致庸は少しためらったがうなずいた。胡沅浦は無言で手をふってかれを行かせた。

胡沅浦はなにか思うところがあるかのように致庸の後ろ姿を見送っていたが、続いて、思いつめた顔でそそくさと服を着ている茂才を顧みた。

「さきにも言ったように、ここ貢院は朝廷が国のために人材を選ぶ場所だ。孫茂才、おまえも話があるなら話すがよい！」

茂才はびつくりしたが、ちよつと考えてから口を開いた。

「ありがとうございます。もしほんとうに話を聞いてくださるのであれば、わたくしにも申し上げたいことはございます」

胡沅浦は手をあげて促す仕草をしてみせた。茂才は拱手して言った。

「さきほど祁県生員の喬致庸は、なにも取ってお二人に非礼なことを申し上げたわけではないのです。かれはただ哈大人がさきほど山西商人に関して仰った高説について、いささか公平を欠くと思っただけなのでございます」

「公平を欠く？」

胡沅浦が問い返すと、茂才はうなずいて声を抑えた。

「哈大人は長年にわたって山西を治めておいでですから、山西は人口が多く土地が狭いことをご存知でいらつしやると存じます。当地の人間が家を棄て、はるか遠くで商売をすることも厭わぬのは、そもそもそうせざるを得なかったからなのです。しかし今日の状況をご覧になれば、

『第二章』

乾隆帝をして天下一の富める土地であると言わしめた山西ですら、街を埋め尽くす避難民であふれております。大臣にお伺い申しあげます。一体何が原因で、かほど多くの避難民が出来たのでしようか？」

胡沅浦が哈芬を見やると、哈芬は仕方なく咳を一つした。

「本官にはしかとはわからぬ。そなたに言ってもらおうか。一体何が原因なのだ？」

茂才は群衆を見回すと、突然沈痛な口調になった。

「お二方にはご無礼の段お許しください。わたくしの知るところによりますと、避難民の多くは潞州と蒲州からやつて来ております。潞州からは失業した織職が、蒲州からは失業した茶民が来ているのです。山西商人が商業を重んじるがゆえに、かれらが物乞いになったわけではありません。たまたまここ数年南北を繋ぐ絹と茶の交易路が遮断されてしまったために、かれらの生活の道が断たれたのです。大人、今日山西の民が困窮しているのは、山西商人が商売を重んじ儒学を軽んじたからではなく、商業の不振ゆえです！もし今日の山西の万民の困窮を解きたいとお考えなら、地方官僚がすぐに……」

哈芬が突然爆発した。

「たくさんだ！ き、きさま、生意気な！ 本官に説教するつもりか？」

「哈大人、落ち着きたまえ」

胡沅浦はそう言って茂才を振り返った。

「続けなさい。そなたはどうやったら今日の山西の万民の困窮を解くことができるか考えるのだね？」

「大人、歴代の王朝が常に商業を洪水猛獣の類と見なしてきたことは実に大きな誤りです。今日の山西の民の困窮を解くためにやるべきことは、まず交易路を新たに開通させ、人々を本来の仕事に戻らせることなのです。商を抑えることではなく、商を興すことなのです！」

茂才が言い終わらぬうちに、龍門の中の致庸と群衆から同時にどつと賛嘆の声があがった。胡沅浦は黙然としていたが、ふいに身体を返すと手をふった。

「この者を入らせろ！」

野次馬は思わず拍手し、長栓はほつと深いため息をついた。雪瑛もまた手を合わせて「南無阿弥陀仏」と幾度も唱えた。陸大可が馬車の中の玉菡を見やると、玉菡は顔を赤らめてきつと窓布を閉じた。

「門を閉じろーっ！」

指揮官が叫び、ついに龍門がギギギッと音を立てて閉まった。

「茂才兄、感服いたしました！」

茂才は自分に向かって拱手する致庸を見つめると、冷やかに鼻を鳴らしスタスタと行ってしまった。

「茂才兄、わたしは心からあなたと友だちになりたいと思っています！」

致庸が声を張り上げても、茂才は振り返りもせずと言った。

「ここに来る時言っただけ、身分違いのつきあいにはご免だとな！」

致庸はかぶりを振って自分にあてがわれた受験用の小部屋に向かった。

貢院の前で、胡沅浦は立ち止まると燃えている線香を見つめ、線香が燃え尽きると声を張り

上げた。

「聖旨である！」

胡叔純が続いて大声で伝えた。

「聖旨である！」

居合わせた人々や土地の有力者たちが一斉に跪いた。一頭の馬が貢院龍門に駆け寄ると、受験用の小部屋の間をドッドツと走りながら、馬上の人が長々と叫んだ。

「聖旨である！」

致庸や茂才を含む生員たちも、それぞれ自分の小部屋の中で跪いた。

「皇帝陛下よりの聖旨である。本年の太原府郷試の出題は『大国を治むるは小鮮を煮るがごとし』『老子』である！」

小部屋の中の生員たちは口々につぶやきだした。

「大国を治むるは小鮮を煮るがごとし……」

貢院の外では商人たちが見守る中、胡沅浦と哈芬が輿に乗り、一斉に鳴り響く楽の音に送られて離れていった。陸大可は馬車に乗り、娘に向かって言った。

「さきほど勅命大臣の前で山西商人のために話をしたあの二人だが、若い方は何者か知っているかね？ 当人は違うと言っておったが、あの男こそ祁県喬家堡の喬家の当主の弟なんだぞうだ！」

玉菡は懐に抱いた猫を撫でながら嬌声をあげた。

「お父様、またお婿さん候補を見つけたの？ 今度のお出かけでは、ずいぶんたくさんのお婿

さんが見つかりますわね」

「わしが見つけてどうする？ わが娘が見つけんことには話になるまい！」

「お父様ったら、言ったでしょう、わたしは一生お嫁になんか行かないわ。ずっとお父様のおそばにいます！」

陸大可は笑ってかぶりを振ると馬車を出した。玉菡は目の隅で群衆の中にいる雪瑛の姿を捉えた。雪瑛もまた彼女に一瞥をくれた。この時玉菡は、なぜかは知らぬが身の内に異様な不安を感じた。しかしそれが何に起因するものかはわからなかった。ちょうどその時、陸大可にあれこれ話しかけられて、玉菡はその感覚を取り逃がしてしまった。陸家の馬車は次第に遠ざかって行った。

雪瑛が龍門で待っていると、あたふたと長栓が馬車を寄せてきた。

「雪瑛お嬢さん、若旦那様はともかく中に入られました。夜明け前までにあなたを祁県に送り返し、それから改めて迎えに来るようにとのお言いつけです。さあ参りましょう！」

雪瑛は尚も名残惜しげに龍門を眺めていたが、突然振り返った。

「長栓、あなた、若旦那様は合格すると思っう？」

長栓は鞭を響かせて言った。

「おや、それをお尋ねになるんですか？ 若旦那様が本気で合格したいならきつと合格なさいますとも！ だけどしたくないのなら合格なんかしないでしょう！ 若旦那様の心のうちはだれにも量り知れませんからね！」

雪瑛は深いため息をつき、後ろ髪を引かれる思いで馬車に乗った。